

石と証 (一)

書評、研究、ときどき査読⁽¹⁾

沈 恬恬

1

『紅樓夢』は中国の文学発展史における金字塔とされ、日本の『源氏物語』としばしば比較される⁽²⁾。東方の古典小説の最も高い到達点を代表しているとされる『紅樓夢』について、『新訳「紅樓夢」』⁽³⁾の訳者である井波陵一による「論文集」⁽⁴⁾が2020年4月に出版された。この「論文集」は、「京大人文研東方学叢書」(第10巻)に属する。本書は、3つの部分に分かれている。主に、①作品の世界における主要な登場人物像についての紹介、②作品の背景に関係する作家像についての紹介、③作品の受容のプロセスとともに現れた「紅迷」⁽⁵⁾像についての紹介といった、「人間諸相」がまとめられている。『紅樓夢』の物語のイメージ、また、「『紅樓夢』研究」の諸相の概観をつかむには、まったくの初学者にとっても、分かりやすい「学術入門書」であろう。

しかし、「学術界」にいた著者は、本書のなかで、自らのスタンスを『紅樓夢』の「研究者」ではなく、『紅樓夢』の「愛読者」としている。その理由とは、著者がこれまで「作者の伝記資料の発掘、テキスト相互の異同に関する緻密な比較研究、様々なモ

チーフをめぐる細かい文学的考察といった、いわば「客観的な」文学研究の王道において、何一つまともな論文を書くことができなかった」⁽⁶⁾からだ。これは、「客観としてあるべき研究とは何か」をめぐる、一度でも苦悩したことのある人なら、胸が痛くなる言葉だ。

いつからか、文学研究の王道である「客観性」は、科学的、ないし、測量的な方法論によって担保されるようになった。つまり、「文献学的研究」の文体に囚われた「批評」の持つ「学術的価値」が問われる。実証性のない文体は、書評やエッセイ、あるいは、「大衆向け」といった「別枠」が設けられ、「研究」としての「学術的価値」を有しないとされた。ただ、忠実な実証が実践できたからといって、実験による結果の「価値」は、どのような実証によって、再測定できるのだろうか。

文学研究の王道を歩まなかった著者は、本書の冒頭で、すでに読者の鑑賞眼によってさまざまな読み方ができたという魯迅の『紅樓夢』についての見解⁽⁷⁾を引用したあと、このように述べた。「超一流の作品は、どのような解釈に対しても、なるほど一理があるかのように受け入れてくれる。それゆえ論文は量産され続ける。一方で、どの

ような解釈に対しても、まるごと身を委ねたりしない。それゆえ論文はたちまち屍となって積み重なり、朽ち果てる」⁽⁸⁾。このような「紅樓夢研究」は、「対象に届いたように見えて、実は少しも届かないままに終わる」⁽⁹⁾ので、作家が「『紅樓夢』を書くことにおいて目指したものは何か」⁽¹⁰⁾を考えることができなくなる。

この指摘は重要である。「書くことにおいて目指したものは何か」という「客観」を問うことは、なぜこの作品を書くのか、また、なぜこのように書くのか、といった作者の「主観」を問うことである。したがって、書かれたものをいくら比較や実証をしても、このような「客観的証明」は、作品の「魂」ともいえる「主観」に通ずる証明とならないなら、証明行為自体は無効となる。

もちろん、「客観」的（科学的かつ測量的）な研究方法は、テキストの解読によって何の意味もなさないわけではない。例えば、『紅樓夢』に限っていえば、原稿本や原稿本をもとにした写本が現存せず、アクセス可能な文献は、内容も筆跡も書き込まれた評釈もタイトルも異なる数多くの「抄

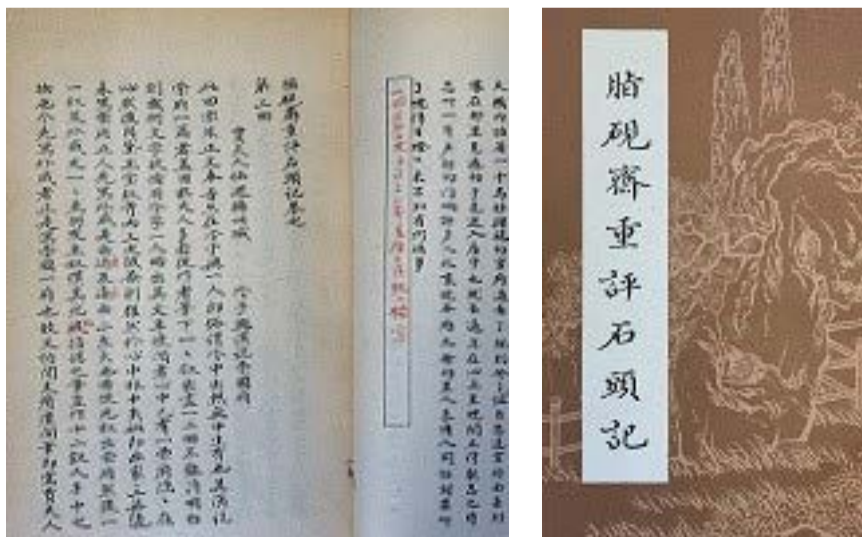
本」であったため⁽¹¹⁾、「研究」が開始された初期には、作者が誰か、程偉元らの木版本となった底本の前80回と後40回の作者は同一人物か、作品はいつ成立したか、といった初歩的な謎が残されていた。

そこで、これらの謎を解く計量文献学は、1980年代に、47個の虚辞の文字頻度に関する統計論的分析を通じて、以下の可能性を提起した。前80回が同一人物による書かれたものと判定できないし、まったく関係のない書き手が後40回を書いたとも考えられないことから、『紅樓夢』の作者は、複数名がいた（もしくは、複数の異なるテキストを用いた）かもしれない⁽¹²⁾。「人工知能」云々がもてはやされ、AIによる歌や小説の創作が可能となった2020年代の今日、この結論の信ぴょう性が高いとも思われる。しかし、文献学的研究の価値を崇める文学研究では上記の機械による客観的な証明を、必ずしも彼らの客観的研究のなかで、積極的に紹介をせず、さしあたり『紅樓夢』の作者は曹雪芹である、という心地よい「通説」を放棄できなかった⁽¹³⁾。おそらく、出版資本主義のもとで、「著作権者」がいなければならないという強迫観念が動

作しているからだろうが、「紅学」（『紅樓夢』に関する学問、狭義的にいえば、『紅樓夢』のテキスト研究）を学ぶには、まず「曹学」（作者の曹雪芹および曹氏一族に関する研究）を学ばなければならないという滑稽な現象まで起きた。

このように、法的な保護のもとで、曹雪芹という人物のゾンビ化が、小説の翻訳とともに言語を問わないまま加速した

図1 筆者所持の「己卯本」の影印本、上海古籍出版社1981年



にもかかわらず、著作権法ないし、法的帰属を問う際に、関係する法的客観の基礎となる作者の推定、抄本の真贋判定、成立年などに関する客観的な答えは、文学研究の王道からは、一度も「正しく」出されたことがなかった。理由は、簡単である。胡適以来の「実証紅学・新紅学」が唱えた「曹雪芹自伝説」という「査読基準」に従えば、実証作業は必然的に、曹雪芹の生い立ちにフォーカスしなければならない。自伝であるゆえに、はじめに作者ありきだからである。

ところが、法制史の指摘に注目すると⁽¹⁴⁾、江寧織造（皇室に納める衣料品の製造調達を行う職）を代々務めた曹系の家系図をどう並べ替えようと、龍、九、黄色い、などといった帝王家の使用のみが許されたモチーフを、清に統治された漢民族の一「包衣」家族⁽¹⁵⁾が、「文字獄」のある時代では、大胆に使える人はいないだろう。言い換えれば、もし、文学研究の王道を歩む研究者らも、封建、統治、歴史といった「印綬」的な概念が存在すると認めるのであれば、これらの概念のものにある律法を侵してまで⁽¹⁶⁾、曹雪芹が単なる「消遣」するための小説を書いた、と強調する必要があるのだろうか。これは、皇帝とは親しい関係にあるからいい、という理由で納得できる結論ではない。むしろ、安易な納得こそ、「真偽」判定に密接する学術的「価値」を損なうことである。

また別の例を挙げる。ジェンダーや社会学的視点をとった文学研究から『紅樓夢』にアプローチすると、『紅樓夢』は、女性崇拜、反封建的、といった女性の権利が重

視された小説として読める⁽¹⁷⁾。けれども、まさにこれらの文学研究でも指摘した纏足問題⁽¹⁸⁾の事実に関してはこうである。「曹学」のなかで、曹雪芹の祖父・曹寅の乳兄弟として登場する清の第四代皇帝・康熙帝は、康熙3年（1664年）纏足禁止令を出したのは確かだが、康熙7年（1668年）廃止した。以後、法的な禁止はなかった。また、康熙帝が即位したのは8歳（1661年）で、親政を始めたのは15歳（1669年）であった。つまり、この反封建的な女人崇拜は、祖母の孝莊文皇后の意思に関係するものであって、康熙帝本人の意思はあまり反映されていないと考えられる。ゆえに、曹の一族が康熙帝の庇護を受けていたという事実があったとしても、『紅樓夢』が康熙帝在位期間中に成立したのものではないことから考えると、物語に登場した女人たちは、纏足禁止令のなかった時代を生き残った者なのか、纏足を必要とされなかった者なのか、のいずれかであろう。前者であれば、曹雪芹自伝説はあやふやになる。後者であれば、曹雪芹はそもそも漢民族ではないということになり、反清反統治反封建の「政治問題」もおのずとなくなる。

2

はじめに作者ありきは、学術的価値を有する人文学の文献学的研究にとって、間違った命題ではない。しかし、すでに見てきたように、紅樓夢研究において、王道の方法論によって導かれた結論の脆弱さは、「作者は何を目指したのか⇒○○○⇒作者はなぜ○○○を目指したか⇒作者はどのよ

うに〇〇〇を実現したか⇒これを、このように書けば作者が目指した〇〇〇になったのか⇒・・・」まで問いを立て続けられなかったことによる。では、このように問いの連続式を立てたなら、作者推定、真偽判定、成立時間推定はできるのか。

2020年3月、中国の「紅迷」のひとりである頼曉偉による「宝璽学」の確立を目指す「ブログ本」⁽¹⁹⁾が出版された。本書は10章からなる大作である。主に、①『紅樓夢』と乾隆帝の25種の宝璽の関係についての検証(1章)、②『紅樓夢』の物語の舞台とモデルになった実在の場所についての検証(2章)、③『紅樓夢』と清代の歴史との関係についての検証(3-6章)、④『紅樓夢』における人物像の関連性、詩詞の関連性についての検証(7-8章)④『紅樓夢』の原作者、成立時間、現存する抄本の真偽、詩詞の出典といった謎についての検証(9-10章)、と分けることができる。

これは極めてユニークな「書物」で、「研究」である。魯迅の見解からすれば、この研究の出発点は、「宮廷の秘事」を見たい、詮索好きに属する。いわば、蔡元培が提起した「政治小説」⁽²⁰⁾に源を見ることができる。ただ、この研究の詮索好きは、もはや「好き」でとどまらない。おそらく、「右手に清王朝の正史の語り(コーラン)、左手に石の語り(『紅樓夢』の別名は『石頭記』)といった具合だろう。紅学研究の泰斗の周汝昌に決して劣らない「実証学」⁽²¹⁾を踏襲しつつ、徹底したテキストへの回帰の姿勢がみられる。そこで、著者は、『紅樓夢』という作品の存在意義(何を目指したのか、

なぜ書くのか、なぜこのように書くのか)に関して、以下の重要な問いを答えることができた。

①『紅樓夢』の作者

この研究では、曹雪芹実在説を否定し、曹雪芹擬制説を唱えた。曹雪芹を名乗った、もしくは、構築した作者は、康熙帝の孫のひとりの愛新覺羅・弘暉(1707年12月31日-1759年1月28日)である。ただし、『紅樓夢』が作者の自伝的小説、もしくは、ドキュメンタリーであるという解釈は既存の説を踏襲している⁽²²⁾。

本稿の1でも述べたように、曹雪芹自伝説から曹一族実在説になって、曹雪芹の記念碑は作られていくけれども、文献学的研究者らがどんなに文献を渉獵しても、曹雪芹についての生年月日が推定できず、DNAの欠片すら見つけることができなかった。ただ、「四大家族の衰弱の物語」から「制度批判」を見出そうとする見解自体は、批判すべきことではない。確かに、「政治」は往々にして、家族から始まり、家族で終わる。つまり、一種の内なる闘争である。旧紅学者らが見る政治は、「反清復明」の民族闘争であり、共産党と結びついた新紅学が見出そうとする政治は、「家族の衰弱」の階級闘争である。一方、本書の著者が見た政治は、政治の原型ともいえる後継者らの「九王奪嫡」⁽²³⁾の宮廷闘争である。これは、紅樓夢の抄本に付随した「脂硯齋」の注釈の意図と一致する⁽²⁴⁾。つまり、作者は、この作品において、歴史に記録されない野史としてこの物語を残すことを目指

していた。残された大文字の「歴史」や「法」、
に対抗できるのは、「物語」や「記憶」で
しかない。

②作品の成立時期と抄本の真偽

続いて、作者がなぜこの物語を残したい
のか、あるいは、なぜ、歴史として残せな
いのか、どのように残すか、といったこと
に焦点が当たる。著者の実証によれば、権
力の証は、玉璽である。政治闘争はこの「玉
璽」をめぐる展開される。では、どの石
が「御璽」になり、いつ権力と合体できた
のか。著者は、乾隆11年(1746年)、乾隆
帝が用途の混乱している数多くの玉璽のう
ちから、25種だけを選び、国事に用いる「御
璽」として指定したことによって、『紅樓夢』
が成立した、と考えた⁽²⁵⁾。つまり、その
成立時期は、1746年－1754年の間である。
また、現存する抄本は「甲戌本」がすべて
の抄本の最初の底本である。注釈を行った
「脂硯齋」は、廢太子の愛新覚羅・胤禛の
兄弟で、作者の叔父にあたる、愛新覚羅・
胤禔(1711年2月27日－1758年6月26日)
である⁽²⁶⁾。

③人物像の持つ意義

王道を歩む文学研究者らは、『紅樓夢』
の人物描写の緻密さに太鼓判を押さないも
のではない。これは、作家の創作の技法とし
ての「客観」であって、なぜこう描くのか、
なぜそのように描かないのかという作家の
創作の目的としての「主観」を排除した評
価である。しかし、本書において、御璽と
いう石に注目したことから、著者は作家の

創作目的である主観についても解釈でき
た。

なぜ、『紅樓夢』に女子の「金陵十二釵」
の喩えがあるのか。なぜ、「金陵十二釵」
は「正十二釵」と「副十二釵」があると言
いながらも、登場した女子の数は24人に
収まらないのか。また、なぜ、「正十二釵」
にあたる女子にだけ彼女らの運命を表す
「判詞」があるのか。

これは、金陵を本籍とする十二人の佳人
が本当にいるからではなく、国事に指定
された御璽は25種があるからだ。「宝玉」
(男の主人公)は「皇帝之宝」を意味する
玉璽であるが、太子が廢止され、皇帝にな
らなかったため、「偽(賈)宝玉」となっ
た。ふたりの女の主人公について、林黛玉
は木製の「皇帝之宝」を意味する御璽で、
薛宝釵は黄金製の「大清嗣天之宝」を意味
する御璽である。その他の御璽はそれぞれ
の用途を持ち、これまでの清の王朝におい
て重要な皇后や妃たちについての物語であ
る⁽²⁷⁾。

なぜ、このような喩えを使うか。そもそ
も喩えを使うことは、ある実在した人物に
対応する人物像をつくることではなく(こ
れこそ文学研究にとって重要な「客観論」
で、作者の創作技法論)、物語の実在性を
再現する情報のネットワークを構築するこ
とである。もちろん、これらの御璽に喩え
られた主要人物も実在する人物との一対一
の対応になっていないが、重大な「宮廷の
秘事」(物語の構成要素)を語るために、
それぞれの御璽は、自らの役割を果たせ
たと考えられる。ここで、著者の実証でき

重要登場人物が対応する「御璽」の一覧表を簡単に示しておく⁽²⁸⁾ (表1)。

表1

乾隆二十五宝	使途	登場人物
1、大清受命之宝	以章皇序 (王権神授の証明)	王熙鳳
2、皇帝奉天之宝	以章奉若 (天命に従う)	秦可卿
3、大清嗣天之宝	以章繼繩 (後継者を決める・黄金製)	薛宝釵
4、皇帝之宝	以布詔赦 (皇帝の印・詔書、赦旨・青玉製)	賈宝玉 (主人公)
5、皇帝之宝	以肅法駕 (皇帝の印・法律、科挙・木製)	林黛玉
7、皇帝尊親之宝	皇太后の戒名、祭祀など	釈妙玉
9、皇帝行宝	以頒錫賚 (公務・賞与)	史湘雲
15、救命之宝	以鈐誥勅 (訓勅など)	香菱
17、命徳之宝	以獎忠良 (忠誠賢良の者を表彰する)	賈母
22、制馭六師之宝	以整戎行 (軍務)	平兒
23、敕正万邦之宝	以誥外国 (外務)	薛宝琴
その他、龍袍 ⁽²⁹⁾	龍を中心に描かれる皇帝の服	襲人

これで物語は残せるのか。残せる。清の宮廷をめぐる謎めいた歴史事件が多かった。物語の中にこそ、これらの歴史事件にまつわる謎を解く手がかりを見出すことができる。物語は、統治者の歴史=正史には書き残せなかったものである。

なるほどと頷くしかない。王権の証である御璽たち(とくに、4番・玉制と5番・木制)を狙おうとして宮廷闘争が行われ、失敗に終わったので、真っ赤の血に染まった悲劇の結末は「真っ白」⁽³⁰⁾であった。もはや、「金玉良縁」(薛宝釵と賈宝玉)や「木石前盟」(林黛玉と賈宝玉)の恋愛物語ではない。これは、権力への執着、フェティッシュ的な狂気にほかならない。

付言すれば、本書は作品の持ついくつかのタイトルの意味についての指摘も極めて鋭い。要するに、「石頭記」は「御璽」を指し、「紅樓」は、これらの国宝を保存す

る「紫禁城の交泰殿」を指している。「風月宝鏡」は、「紫禁城の交泰殿」にある「軒轅鏡」のことで、「金陵十二釵」は、清の王陵に眠る皇后や妃たちのことである。さらに、「情僧録」は、清の出家した帝王のこととなる⁽³¹⁾。また、本書の著者の推論は、1で述べた文学研究では解決できなかった法制史的な疑問にも答えたことになる。統治された漢民族の官僚ではなく、宮廷人物が原型であれば、服装上の違法は違法ではない。清代

の法律用語(刑罰)に詳しい女性像(王熙鳳)がもたらす違和感も少なくなる。もちろん、女子らの纏足を意識する必要もない。

著者は、おそらく「作家がこうだからこの作品ができた」という「客観」ではなく、「書くことにおいて目指したものとは何か」という「主観」を見つけたくて、このような縦横無尽の石(宝璽、御璽)の語りに辿り着いただろう⁽³²⁾。だからこそ、「テキストの意図」にフォーカスでき、『紅樓夢』をこのようにコード本として研究化できただろう。

もちろん、「ブログ本」であるため、個々の実証は、首尾よく王道の文学研究の査読基準に満たすような「研究の目的」や「学術的価値」としてまとめられたものではないが、点在しながらぽつりとぽつりと輝き始める夜空の星たちが作り出した星空の構

図としてみることができる。また、これらの物や者は、まだすべての御璽が語った暗号と一致しているわけではない。それでも、文学研究の王道を占拠し続けてきた「学説」が解釈した「科学的価値」より、一致している暗号のコード数がずっと多いので、しばらく演算し続けられるプログラムであろう⁽³³⁾。著者は、引き続きコード読解の続編と書き込み評釈本を出版したいようで、大いに期待したいところである。この研究は、屍が積み重ねられた研究の廃墟に立つ墓石で、まったく異なる道標であるものとして、評価されるべきである。

3

ここまで紹介した2冊の本が生まれるきっかけは、共に2017年であった⁽³⁴⁾。あの年、筆者は、幸運にも、1冊目の本の著者である井波陵一氏と、ドイツの思想家B・ベンヤミンのある言葉について話したことがある⁽³⁵⁾。「読者は、夢想の自由な空をさまよう、自分の自我の動きにおとなしく従うのだが、書き写す者は、そうした運動に対して号令をかけさせる。中国の書物筆写は、それゆえ文芸化の比類なき保証だったし、写本は、中国の謎を解くひとつの鍵であった」⁽³⁶⁾。『紅樓夢』の抄本で分かったのは、多くの「書き写す者」は、書き写しながら、書き込んでいたのである。この「書き写しをすると同時に書き込みを行う者」が、文化の伝承者である。だから、この言葉を残したベンヤミンも、あの謎の『パサージュ論』のなかで、「文化の伝承」を行うことを目指していたのではないか。そして、

筆者と『紅樓夢』の「愛読者」はともに笑った。

筆者も、「研究者」ではなく、「愛読者」であったため、突飛な方向に脱線して、ベンヤミンの魅力を突き止めようとした。ただし、なぜか恥じらいを持ったままだった⁽³⁷⁾。何について恥じていたのだろうか。ベンヤミンについて何を書いても「エッセイ」の領域を出ず、「学術的価値」を持つ「文献学的研究」にはなり得なかったこと。その「エッセイ」に引用するベンヤミンのテキストすら自ら翻訳せず、既存の翻訳本を頼っていたこと。「ベンヤミン研究」、そして、「ベンヤミン研究者」の狭き門に入る資格は無いこと。だが、恥の意識に苛まれてまで、「研究」の「学術的価値」を至上のものとして追い求めるのは、果たして健全だろうか。また、「学術的価値」を生み出し得ないからと恥じ入るあまりに、追究したい対象への「問い」を放棄することは、対象にも自らにも不誠実ではないだろうか。

2017年以後⁽³⁸⁾、筆者は、化け物のように感じていた「主観なき人文科学」から少しずつ撤退し、法学という、裁判官の心証としてある主観と事実の秤（法）としてある客観が共存可能な社会科学の領域をぶらぶら歩き始めた。しかし、ときどき、「問い」たちは頭を過る。

ベンヤミンは、「書くことにおいて目指したものは何か」。彼の初期作品にあった法（神）と言語との共犯関係、そして、「翻訳」について、どう考えればいいのか。なぜ、『パサージュ論』（「文献学的研究」である文学

研究の王道を歩む人たちは、いまだに納得できる解釈が出せなかった書物)が、彼の死後に発見されたのか。中国の写本文化に対する彼の認識は、彼の『複製技術時代における芸術作品』の問題意識と関連しているのか。さらに、戦争が実行できる物質的要件(例えば、国家と租税)、心理的要件(例えば、B・アンダーソンのいう「想像の共同体」)、また、このふたつの要件が結合する要件(例えば、B・アンダーソンのいう「出版資本主義」)からアプローチすると、ベンヤミンが生きたあの頃の世界にはどんな「政治的闘争」があったのか。言い換えれば、彼の幼年期についてのエッセイである『1900年代のベルリンの幼年時代』にも、『一方通行路』にもある「皇帝パのマラ館」のモチーフや、初期作品『ドイツ悲劇の根源』にある「宮廷」のモチーフなどは、「『紅樓夢』研究」のひとつである「宝璽学」における「内なる政治闘争」(家族、国家)と通じる意味を持つのか、などなど、「問い」は尽きない。だから、可能であれば、改めて、ひとつずつ答えをみつけていきたい。「文献学的研究」の王道を歩む研究者にならなくてもいい。単なる「本迷」⁽³⁹⁾であってもいい(続く)。

註

- (1) 本稿では、『紅樓夢』を指す内容は、作品、作者と呼び、これ以外の書物を指す内容は、著作、著者と呼ぶ。
- (2) 温祖蔭「『源氏物語』与『紅樓夢』」(『国外文学』1985年・第4期)
- (3) 井波陵一「新訳『紅樓夢』」(全7巻)(岩波書店・2013年-2014年)。
- (4) 著者の「あとがき」によれば、この本は、「これまで書いてきたものを何とか繋ぎ合わせて」、「もと

もとほとんど人の目につかない雑誌や論文集に掲載してきた文章」を「できるだけわかりやすく[修正]して再登場」させたものであるという。井波陵一「『紅樓夢』の世界—きめこまやかな人間描写」(臨川書店・2020年)250頁。

- (5) 「ホンミー」と発音し、紅樓夢フリークのことをいう。「しかし、一方では、たとえば『紅樓夢』のような豊饒な文学世界を読み解いてゆくことに、ある種輸贏を争う遊戯に身をゆだねているようなおもしろさを感じることもまた確かである。だからこそ乾隆・嘉慶年間からすでに中国人特有の史実偏重癖と相俟っての「索隠」というモデル探しや「探佚」という後四十回の筋当て、胡適、俞伯平、周汝昌などの「考証」、そして近年の作家劉心武による紅樓夢謎解きシリーズ等々いわゆる紅学家、紅迷たちの議論のつきることはないであろう。」廣野行雄「誰が賈探春の母か—『紅樓夢』読解の一前提」駿河台大学論叢・第37号(2008年)39頁。
- (6) 前掲注4、250頁。中国の現代学術としての「紅樓夢研究」は、主に、1979年、中国芸術研究院に紅樓夢研究所の設立に伴う『紅樓夢学刊(HP: 欢迎访问红楼梦学刊(hlmxk.cn)[最終確認日: 2021年3月31日])』(日中文学文化研究学会紅樓夢研究会編の「東京紅学レポート」にある栗原順子による「中国紅学動向」は、この雑誌の動向まとめである。)の創刊と、1980年中国紅樓夢学会の設立のもとで、「正統」となった。
- (7) 1927年、魯迅が陳夢韶の『紅樓夢』の脚本(全15幕)のために書いた寸評である。「『紅樓夢』は、中国では誰もが知っている。すくなくとも、この書名は知っている。作者が誰で続作者が誰であるかは、しばらくおくとして、その主題に限って言えば、読者の鑑賞眼によってさまざまである。すなわち經学者はそこに『易』を見、道学者は淫を見る。才子は綿々たる情を見、革命家は排満を見、詮索好きは宮廷の秘事を見る……。」ここで述べている「經学者」は清代の張新之を、「道学者」は清代の梁恭辰を、「才子」は清代の花月痴人を、「革命家」は蔡元培を、「詮索好き」は清代の張維屏、王夢阮、沈瓶庵を指している。魯迅『魯迅全集(第10巻)・集外集拾遺補編・(尾上兼英訳)「絳洞小序」』(学習研究社・昭和61年)208頁。魯迅『魯迅全集(第11巻・今村与志雄訳)中国小説略史・第二十四編・清代の

- 風俗小説』(学習研究社・昭和61年)423-452頁。
- (8) 前掲注4、3頁。
- (9) 前掲注4、3頁。
- (10) 前掲注4、249頁。
- (11) ①前80回:甲戌本(1754年)、己卯本(1759年)、庚辰本(1760年)、甲辰本(1784年・「夢覚本」)、己酉本(1789年)、有正本・戚本(清の乾隆年間、1912年に石版出版)、鄭蔵本、靖蔵本(真偽説)、列蔵本(1832年にロシアに持ち出され、1963年発見、1987年中国と旧ソ連の共同出版)、師大本(1957年、2000年発見)、卞蔵本(2006年上海で落札)庚寅本(1770年・2012年に天津で発見)
- ②前80回+後40回:夢稿本(1959年に北京で発見)、王府本
- ③120回:程甲本(1791年)、程乙本(1792年)王評本(1832年)、張評本(1881年)、姚評本(1884年)、など。
- (12) 李賢平『『紅樓夢』成書新説』『負旦学報・社会科学版』(1987年・第5期)9頁。村上征勝が「計量文献学の歴史と課題」『計算機統計学』(第9巻・第1号・1996年)のなかで、「81~120章は曹雪芹の友人が彼の原稿を整理加筆したものである」と結論されている」と紹介しているが、誤訳ではないかと思われる。69頁。
- (13) 王道ではない本書の著者も、おぼろげな作者像について、周汝昌の研究を紹介せざるをえなかった。前掲注4、190-197頁。また、2018年、これまで最も多くの『紅樓夢』の版を印刷してきた人民出版社は、前80回の作者を曹雪芹とし、後40回を無名氏とした。
- (14) 余宗其『法説紅樓夢』(中国財富出版社・2014年)
- (15) 「清王朝を立てた満州族が、中国本土をめざして南下を開始した早い時期に降伏し、[包衣(満州語で奴隷の意味)]として清政権に組み込まれた漢民族の一員だった。[包衣]は皇帝にとっては奴隷だが、対社会的には皇帝の腹心として力をふるい、その地位はきわめて高い。」井波律子『破壊の女神』(新書館・1996年)196頁。同じような表現は、井波律子『トリックスター群像』(筑摩書房・2007年)171-172頁にもある。
- (16) 前掲注14、王熙鳳の服装は「大清律例」の「礼律」にある「服舎違式」条項に反している。63-66頁。
- (17) 合山究「紅樓夢における女人崇拜思想とその源流」(中国文学論集12・1983年)84-109頁、合山究『『紅樓夢』新論』(汲古書院、1997年)
- (18) 「付言すれば、『紅樓夢』世界に登場する少女たちが纏足していたかどうかについては、諸説あって一定しない。纏足説をとる論者は、作者の曹雪芹は漢民族だから、その彼が描写する対象とする少女たちは、当然纏足をしていたにちがいがいないとする。しかし、漢民族とはいえ、曹雪芹の家は、[包衣]であり、早くから満州族と一体化していた。満州族の女には纏足の習慣がないし、曹家の最大の庇護者であった康熙帝は纏足を嫌い、漢民族に対して纏足禁止令を出したほどだ。この禁止令は結局なしくずしになったけれども、曹家一族の女が康熙帝の意に背いてまで、纏足したとは到底考えられない。だから、曹雪芹が自らの周囲にいた女のイメージを純粹化し描き出した『紅樓夢』の少女たちも、纏足などしていないと考える方が、むしろ自然なのである。」井波律子『破壊の女神』(新書館・1996年)209頁。小横香室主人編『清朝野史大観・巻三・清宮史料・「裹足禁令」』はこのことについて触れている(上海書店・1981年)38頁。
- (19) 頼暁偉『頼暁偉重評「石頭記」』(民主与建設出版社・2020年)。邦訳なし。以下に引用されるすべての内容は、筆者による試訳である。
- 「著者紹介」によれば、頼暁偉は、『紅樓夢』にまつわる多くの謎がいまだに解かれていないと聞き、2017年6月から謎ときをし始めた。2017年9月末、中国のSNSでアカウントを登録し、「紅学砖家」のアカウント名で自らの感想を投稿してきた。「砖家」は、専門家を意味する「专家」と同じ音であり、抛砖引玉(れんがを投げて玉を引き寄せ、たたき台にする)という熟語の意味も有している。また、本書は、これまでの投稿をまとめたものである。本が出版された時点のフォロワー数は7万人を超え、延べ3000万回のアクセス数があったという。なお、現在百度にあるアカウントは、紅学砖家(baidu.com)[最終確認日:2021年3月31日]である。
- (20) 『石頭記索隱』で、「作者は民族主義を堅持しており、明の滅亡を弔い、清の失政をあばく物語である」と述べている。胡適はこれに反対した。胡適『中国章回小説考証』(上海書店・1980年)179頁。
- (21) 周汝昌『紅樓新証(1953年版の初簡体字版)』(訳林出版社・2012年)

- (22) 前掲注 19、297 - 306 頁。
- (23) 康熙帝の 9 人の皇子が皇位を争う事件のことである。康熙 47 年 (1708 年) に太子の第二皇子が廃位されたことで、後継者争いが勃発した。当時成年に達していた 12 名の皇子のうち、9 人の皇子第一皇子 (胤禔)、第二皇子 (胤礽)、第三皇子 (胤祉)、第四皇子 (胤禛)、第八皇子 (胤禩)、第九皇子 (胤禕)、第十皇子 (胤祚)、第十三皇子 (胤祥)、第十四皇子 (胤禎) 次の皇位に野望を持った。実質は第四皇子と第八皇子のふたつのグループでの争いとなり、最終的には第四皇子が皇位を継ぐこととなった。
- (24) 脂硯齋の注釈「凡野史俱可毀、独此書不可毀。」(およそすべての野史は抹消してもいいが、この本だけは抹消してはならぬ)
- (25) 前掲注 19、7-8 頁、37-38 頁。なお、数と経緯は異なるが、小横香室主人編『清朝野史大観・卷一・清宮遺聞・「内府玉印」』はこのことについて触れている。(上海書店・1981 年) 57 頁。
- (26) 「脂硯齋」という称号は、脂 (朱肉) を付ける硯 (印鑑) のことである。宝玉は女子たちの胭脂 (口紅) を舐めることが好きということの喩えである、と著者は推論している。前掲注 19、28-29 頁。
- (27) 清王朝の前身は 1616 年明から独立建国した後金国であるので、「金陵」は「南京」の別称ではなく、後金国の「陵墓」を指す。前掲注 19、49 頁。
- (28) 前掲注 19、9-10 頁。
- (29) 小横香室主人編『清朝野史大観・卷十一・清代述異・「紅樓夢包羅順康兩朝八十年之歴史」』も、「龍衣人」としている。(上海書店・1981 年) 41 頁。
- (30) 「只見白茫々一片曠野」(白一色の曠野が見えるだけであった)。
- (31) 前掲注 19、45-51 頁。
- (32) 本書では、この問いは散見された。
- (33) 年表を除き、170 個項目が検証された。
- (34) 「本書の執筆を依頼されたのは、たしか二〇一七年の一月か二月だったと思う。」前掲注 4、250 頁。頼暁偉の投稿は、2017 年の 6 月からとされている。
- (35) 井波陵一は、中国におけるベンヤミン研究についての論文も書かれたことがある。井波陵一「中国におけるヴァルター・ベンヤミン研究について」『東方学報』(76 号・2004 年) 256-312 頁。ほかに、ベンヤミンを方法論とした文学研究についての論文もある。井波陵一「断片であるということ——王
- 国維の『人間詞話』について」『東方学報』(79 号・2006 年) 109-141 頁。
- (36) “Weil der Leser der Bewegung seines Ich im freien Luftbereich der Träumerei gehorcht, der Abschreiber aber sie kommandieren läßt. Das chinesische Bücherkopieren war daher die unvergleichliche Bürgschaft literarischer Kultur und die Abschrift ein Schlüssel zu Chinas Rätseln. “ Walter Benjamin, Einbahnstraße, Band IV・1, S.90. (ヴァルター・ベンヤミン (浅井健次郎ほか訳) 『ベンヤミン・コレクション③記憶への旅・一方通行路』(筑摩書房・2003 年) 29 頁)
- (37) 「[愛読者] ならばこそ、突飛な方向に脱線して『紅樓夢』の魅力を突き止めようとしたことについては、何も恥らっていない。」前掲注 4、251 頁。
- (38) この場を借りて、2017 年以来、筆者が書いた多くの文章の最初の読者になってくださった堀井葉月さんに感謝を述べたい。
- (39) ベンヤミンの中国語訳は「本雅明」である。ここは、「紅迷」をもじった使い方である。